

ぶことを恐れ、藩主の名を汚すことを恐れた結果、『解體新書』にその名を連ねず、「自序」の翻訳に加わることを断念したのであらう。本文の翻訳の中心的存在でありながらその名を遺さずにいた良沢は、「自序」の翻訳に加わってもその名を遺す結果にはならなかったはずであるから。また、封建時代の主従関係は当然のことであつたので、『蘭学事始』にも載せる必要がなかつたのであらう。

(名古屋大学医学部解剖学第一講座)

馬王堆出土『陰陽脈死候』の研究

遠藤次郎

『陰陽脈死候』は『十一脈灸経』とともに、近年、馬王堆から出土した医書である。発見以来、『十一脈灸経』の研究はかなりの成果をあげたが、本書の研究はあまり進んでいない。本書は死相を経脈説で論じている。したがって、この書によって、死相を診ることの意義を知り得るばかりでなく、当時(先秦時代～前漢初期)の経脈説をより深く理解できると考え、演者は本研究を行った。本書の内容は、ちょうど『十一脈灸経』がそうであるように、『靈枢』「経脈」篇に発展的に受け継がれている。したがって、「経脈」篇との比較を中心に、本研究を進める。

本書の前半部は三陰三陽経の体系で構成され、次の記述がみられる。「三陽……唯折骨(裂)膚一死。三陰、(臟爛)腸而主殺」。これと同類の文が『足臂十一脈灸経』の中にもあり、「陽病、折骨絶筋而無陰病、不死」とあ

る。これらの記述から、次のことを把握することができ
る。「陽経は皮膚や筋肉などの形態をつかさどり、陰経は
臓腑などの体内をつかさどる。骨折は骨髄中の精気の虚損
を意味し、形体の病の中でも重病である。これに加えて、
形体に精気を灌漑する役割を持つ臓腑までもが病んだ時、
病はさらに重く、死につながる」。前半部のこの記述は後
半部の総説とみなすことができる。

本書の後半部には、「五死」——「(イ)唇がそり返って
人中が盛り上がっているような人は、(ロ)肉から(ハ)先
ず死ぬ」といった五つの条文——が述べられている。以
下、いゝハを各項目別に検討する。

○「先ず死ぬ」という意味を理解するのに「経脈」篇の
記述が参考になる。即ち、本書に述べられた「五死」を、
「経脈」篇では五臓に対応した五陰経の「気絶」として捉
えている。「経脈」篇の見方と本書の前半部を参考にす
ると、「先ず死ぬ」は次のように解釈される。五臓の精気は
四肢末端から五陰経を通過して上向し、体の上部で尽きる。
したがって、精気の虚脱の症状は上部から下部に向けて起
こり、死候は先ず顔面に現れる。

○「肉から先ず死ぬ」の肉に当る部分を「五死」から抜
き出してみると、気、血、筋、肉、骨であり、これらは古
典に広くみられる五臓のつかさどる形体(皮毛、脈、筋、
肉、骨)に呼応している。これらが「先ず死ぬ」という記
述は、形体から死に始め、徐々に内に向かい、五臓の死に
まで至ることを意味している。この外から内に死候が向か
うとする見方は、前述した上から下に死候が向かうとする
見方と同じ考えに由来している。

○「五死」のうちで、「唇がそり返って……」等の顔面
部の死候を抜き出してみると、唇、齒、舌、目、汗であ
り、これらは九竅および汗空に該当している。九竅および
汗空は外界から天の気や地の気を体内に導入し、これと五
臓の精気とを交流せしめる部位とされている(『管子』「水
地」など)。したがって、死ぬ時には、体内に存在した天地
の精気は五臓の精気から解放され、九竅を通過して、外界に
戻る(『素問』「六節藏象論」など)。このようなことを考慮す
ると、顔面部で死候を診る理由として、五臓の精気の虚脱
が最初に顔面部に現れるからという前述した点だけでな
く、死とともに天の精気が上竅から抜け出すからという点

をあげることができる。

以上、死相を診ることの意義について考察した。

次に、本書の経脈説について検討する。本書は前半部では三陰三陽説を述べながら、後半部では、既に述べたように、五陰経や五臓で議論を展開している。この五臓論は五行説に基づいていることが次のことからわかる。即ち、死候の記載順をみると、肉、骨、気、血、筋であり、これらを五臓と五行に書き直してみると、脾(土)、腎(水)、肺(金)、心(火)、肝(木)となる。この順序は木火金水土という五行の配列を逆にしたものである。このような捉え方は、死ぬ時には五臓の精気の運行が五行を逆向するという見方に因ったものであろう。

「五死」の気、血、筋、肉、骨は「経脈」篇の六陽経のつかざどる部位(液、津、気、筋、血、骨)に近似している(殊に、「気」を精気の意味に用いる点が共通している)。このことから、本書の後半部では陽経を六陽としていえることがわかる。

以上のことから、本書の後半部は『十一脈灸経』と同じ六陽五陰の経脈説に基づいていると考えられる。「経脈」

篇の「五陰の気絶」と「六陽の気絶」の記述もこの推定を支持している。

『十一脈灸経』の研究結果から、当時の経脈説の中に五臓論や五行説はないという見方が一般的である。しかし、演者は、本研究の結果から、五臓論や五行説に基づいた経脈説が当時から存在していたと考えている。

(東京理科大学薬学部)